

インドライオンのトレーニング ～展示場馴致から採血まで～

古田 洋 久保田夕紀子 栗原暖佳

インドライオンの飼育においては、日常で行う小間移動や健康チェック、定期的に行う体重測定や採血などをトレーニングにより行っている。本稿では新規個体の展示場への馴致および採血について報告する。No,16 (♂バドゥリ) は 2017 年 7 月 4 日より新たに運動場への展示練習を開始したが、10 月になると運動場へ出ることを拒否するようになった。おそらく昇降式の電気柵に触れたことが原因と思われる。そこでターゲットトレーニングにより A 点から B 点に移動することを教え、B 地点の距離を延ばすことで、再び運動場へ出るように働きかけた。12 月 28 日には運動場全体を歩くようになり、2018 年 1 月 13 日には昇降式電柵を降ろしても展示用で伏臥して休息するようになった。採血について、それまで当園では麻酔下でのみ採血を実施していたが、メス個体が高齢であることを踏まえ、無麻酔下で採血を行うことを目的にトレーニングを行った。対象は No,11 (♀ガウリー)、No,12 (♀パールヴァティ) で、2018 年 3 月 22 日より開始した。まずは動物が採血を行う場所に慣れていることを確認した。次に動物が柵に対して横向けに体を付けるように仕向けた。この時、動物が柵にピッタリ体を寄せる状態にするために、U 字ブロックを利用して柵との間に隙間を設けた。次に水飲み用のバッドを外し、その隙間からライオンの尻尾のみ取り出し、尻の根元付近を駆血した後に尾の静脈より採血を行った。採血時には 4 名が役割を担い、それぞれ誘導、給餌、駆血、採血の役割とした。尚、トレーニングは基本的には一日に 1 回で、通常の給餌時間の直前にトレーニングを行った。初めて採血が成功したのは、No,11 ♀ではトレーニング実施 50 回目、No,12 ♀はトレーニング実施 46 回目であった。トレーニングにおいては、目標の行動を決め、それに至るまでの細かなステップを定め、動物が達成できていることを確認しながら段階を上げて行った。全行程において、動物がリラックスしてその場に留まっているかどうかを注目した。採血が実施可能となつてからは概ね月に 1 度の採血を行い、健康状態の把握に努めている。